

2024年度 第1期 オンライン研修・講習会のお知らせ

一般社団法人 日本音楽療法学会
研修・講習委員会

2024年度 第1期 オンライン研修・講習会は、**新作3講座**、**再配信2講座**をご視聴いただけます。

2024年6月3日(月) 正午～2024年8月30日(金) 午後11時59分まで視聴することができます。

動画の視聴申込は 2024年6月3日(月) 正午より、マイページにて行ってください。

□ 2024・第1期 - 1・新作

タイトル	歌唱音声の音響分析と人の評価に相関はあるか？ ～歌唱訓練による運動障害性構音障害の発声明瞭度の向上を目指して～
内容	音楽療法のプログラムに発声の明瞭性の改善を目的とした歌唱活動を取り入れた場合、評価が難しい面があります。そこで、客観的に発声を評価する手法としてコンピューターを用いました。同時に、人がその音声を聴いたとき同様に評価しているか相関について分析しました。特に、運動障害性構音障害を対象にした歌唱訓練において、継続的な訓練の意義と効果、そして改善しやすい音楽の要素についての研究をお話いたします。
講師名	七原 真紀
プロフィール	アラスカ州立大学アンカレッジ校 音楽学部演奏科卒業 名古屋音楽大学大学院音楽研究科修士課程音楽教育学専攻（音楽療法）修了 豊橋技術科学大学大学院工学研究科博士後期課程情報・知能工学修了 新城市おおぞら園（児童発達支援施設）、愛知県厚生事業団愛厚希全の里、鳳紀会可知病院リハビリテーション科に音楽療法士として勤務 現在：小田原短期大学保育学科 通信教育サポートセンター（名古屋）専任講師 日本音楽療法学会認定音楽療法士、岐阜県音楽療法士

□ 2024・第1期 - 2・新作

タイトル	「通じ合う心」のはじまり —コミュニカティブ・ミュージカリティの理論と実際—
内容	声を合わせて歌ったり一緒に手拍子したりすると、心が通じ合った心持ちになります。リズムカルな同調は人間社会の凝集性を高めると言われ、音楽と向社会性を結び付ける向きもあります。本当にそうなのでしょうか。こうした現象の根拠として注目されているのが、乳児科学の分野で Trevarthen らが提唱するコミュニカティブ・ミュージカリティ概念です。Trevarthenらは乳児と母親のやり取りが音楽的特徴をもつことを示し、人の生得的音楽性が心の通じ合いを支えると言います。講義では母子間コミュニケーション研究の成果等を取りあげて通じ合いの「はじまり」を探求し、人と人をつなぐ音楽の力とは何か、私たちが留意すべきことは何か、一緒に考えたいと思います。
講師名	今川 恭子
プロフィール	聖心女子大学現代教養学部教育学科教授 東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、同大学院（音楽教育専攻）博士後期課程満期退学。家庭や保育現場におけるフィールドワークを通して、乳幼児期の表現とコミュニケーションの育ちを音楽的な視点から研究している。こども園、幼稚園、保育園でのワークショップやカリキュラムの共同開発も行っている。

□ 2024・第1期 -3・新作

タイトル	音楽療法士のためのテクノロジー入門 ～IT への苦手意識脱却ガイド～
内容	インターネットを始めとしたテクノロジー活用が音楽療法界に浸透する中、「なかなか一歩を踏み出せない」「必要なのは分かるけれど自分には無理な気がする」など、苦手意識を持つ音楽療法士の声が多く聞かれます。このように感じるのは、もしかしたら大前提となる大切な何かが抜け落ちているからかもしれません。頭の中でぐんぐんと高くなってしまった IT ハードルを下げるために、学会発表のための動画作成手順を始めとし、遠隔音楽療法やセッション動画作成の話まで、講師の実体験を交えて分かりやすく具体的に紹介します。
講師名	小沼 愛子
プロフィール	合同会社 Music Fits Japan・任意団体音楽療法かけはしの会代表。バークリー音楽大学音楽療法学部卒業後、米国ボストン市内の高齢者施設にて新音楽療法プログラムを設立、常勤音楽療法士として勤務。その後フリーランスとして活動、0 歳から 105 歳までを対象に、音楽療法・教育・演奏・研究を通じて様々な人と関わる。音楽療法士のサポートと継続教育に力を入れ、国内外での講師・執筆経験多数。オンライン上での関連活動も 10 年以上継続する。

再配信講座は、次ページになります。

※再配信動画について

再配信動画は、以前配信したものと同内容です。

上記配信期間に申込みおよび視聴された方は、今回申込みできませんので予めご了承ください。

□ 2024・第1期 -4・再配信 (2022/12/19~2023/1/31 配信分)

タイトル	音楽の力と認知機能 ～重度認知症があっても音楽はできる！
内容	60歳以上の世界人口の割合は急速に増加しており、日本ではすでに30%を超え、2016年以降、認知症が介護を必要とする最も多い理由となっています。また、通常のカラダでも、認知機能に関する神経基盤に変化が起こり、特に前頭前野領域に影響を及ぼします。したがって、認知機能の維持改善は、カラダを成功させるために非常に重要です。しかし、認知症があると新しいプログラムに参加することが難しくなります。音楽、特にリズムがあると、認知症や身体虚弱があっても誰でも参加ができ、且つ認知機能を維持・向上させるプログラムになります。高齢者の認知機能のレベルに合わせた認知機能改善プログラムについてお話します。
講師名	宮崎 敦子
プロフィール	博士（医学）。 東京大学先端科学技術研究センター 身体情報学分野 特任研究員。 東北大学大学院 医学系研究科脳機能開発研究分野 博士課程修了。国立研究開発法人 理化学研究所 情報システム本部 計算工学応用開発ユニット 研究員を経て現職。脳と音楽の関係、ドラムを用いた認知症予防・改善プログラム開発などの研究を行なっている。 ダンス・ボカールユニット TRF と共同で高齢者向け健康長寿プログラム DVD『バイバルダンス』の開発も行なっている。このダンス効果を60歳以上の健康高齢者で検証した結果、認知機能改善に有効であることを報告した。 また、Dr.DJ.ATSUKO 名義で長年 DJ 活動を続けている。日本神経科学学会会員。同学会による市民公開講座「脳科学の達人」でも DJ を行なっている。 著書「すごい音楽脳」(すばる舎)

□ 2024・第1期 -5・再配信 (2021/12/15~2022/1/31 配信分)

タイトル	音楽と人間：音楽療法士とクライアントの関係性
内容	音楽療法も含めセラピーとは、セラピストとクライアントの関係性の中で起こることであり、その間に育まれるラポール (rapport, 相互信頼) が最も重要な要素です。関係性を築くと口で言うのは簡単ですが、実際には難しく複雑なプロセスを経なくてはなりません。 心理学者のユングは「ふたつの人格が会うことは、ふたつの化学物質が接触するようなもの。もし何か反応が起これば、両者とも変化する」と言いました。この講習会では、音楽療法士とクライアントの関係性についてお話します。
講師名	佐藤 由美子
プロフィール	ホスピス緩和ケアの音楽療法を専門とする、米国認定音楽療法士。バージニア州立ラッドフォード大学大学院音楽科を卒業後、オハイオ州のホスピスで10年間、音楽療法を実践。2013年に帰国し、日本国内の緩和ケア病棟や在宅医療の現場で音楽療法を実践し、テレビ朝日「テレメンタリー」や、朝日新聞「ひと」欄でも紹介される。2017年に再度米。著書に『ラスト・ソング～人生の最期に聴く音楽』『死に逝く人は何を想うのか』(ともにポプラ社)、最新刊として『戦争の歌がきこえる』(柏書房)。